

Title	飯田裕康・高草木光一編 『生きる術としての哲学：小田実最後の講義』
Sub Title	
Author	根津, 朝彦(Nezu, Tomohiko)
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	2008
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.101, No.3 (2008. 10) ,p.587(191)- 590(194)
JaLC DOI	10.14991/001.20081001-0191
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-20081001-0191

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.



飯田裕康・高草木光一編

『生きる術としての哲学
——小田実 最後の講義——』

岩波書店，2007 年，264 頁

10 代のうちに海外を一人旅したいと思い，19 歳のときイランを一ヵ月旅したことがある。それは多分に偶然だったが，その折に携行していた書物が，小田実の『何でも見てやろう』であった。そこに登場するのはエジプトで「メンフィス，メンフィス」と疲労と不信で怒鳴りまくる小田であり，「私は，何かユカイなこと，面白いことがあると，それを日本語で，それもわがなつかしの大阪弁で言う妙な癖がある。『オイ，オモロイヤナイカ，オッサン』」と豪放磊落に破顔する小田の姿であった。このような明治初期の留学生から数えて自らを三代目と称する小田の旅行記にどれだけ多くの者が視野を開かせられただろう。そして評者もこうして小田の著作を書評することとなった巡り合わせには何ほどの縁を感じないわけにはいかない。

その小田青年が，いつしか齢を重ねた老青年として，大学の青年たちに「現代思想」の講義を行った記録がこの『生きる術としての哲学』（以下，引用言及する際は頁数のみ記す）である。本書は 2002 年度の慶應義塾大学経済学部で行われた「現代思想」の 13 回分の授業のうち小田が話した講義部分をまとめ，それに関連する補論を収録したものから構成される。2001 年度の小田の同様の講義録『ここで跳べ 対論「現代思想」』（慶應義塾大学出版会，2003 年）とその授業テキストとして用意された『小田実の世直し大学』（筑摩書房，2001 年，以下『大学』と略記）と合わせた三部作の最

後の一冊を飾るものである（刊行が遅れた理由は高草木光一「小田実氏と『現代思想』」『環』31 号を参照）。

講師の小田実と，編者の飯田裕康と高草木光一の合作によってつくられたこの三冊に通底するものは，大学は市民養成の学校たりえているのかという問題提起である。それは「問題なのは，学生が『市民性』を認識する契機が，いまの社会にはないということですね」（『大学』126 頁）という飯田の発言に代表されている。現場で活動をするゲストスピーカーとの対論を重視した講座「現代思想」という発想は，あるいは小田が代々木ゼミナールの講師時代に「教養講座」なる講演会を開き，そのうち最も人気があったのは「日本の現場の声」であったという実践にも関連しているのかもしれない（『日本の知識人』講談社文庫版 283 頁）。

内容を各章ごとに要約することはしないが，『生きる術としての哲学』の目次だけ掲げておく。「まえがき」，「I 世界をどう捉えるか」，「II 人間のための科学技術」，「III 戦争主義と平和主義」，「IV 地方自治と市民の政策」，「V 世界史のなかの日韓関係」，「VI 市民の経済と文化」，補論「1 ベトナム戦争と戦後世界」，「2 アジアを見る目」，「あとがき」，「小田実著作目録」，「人名索引」からなっている。

前作にあった「必死に考える人たちがここに残れ。嫌な人は帰れ」，「それはアホや。大学生やる，ちゃんと考えろ。ここは考えるところや。物知りになって威張るところと違う」，「それだけやったらあかんわ，君の採点はゼロや」（『ここで跳べ』8，13，18 頁）といった学生との丁々発止の語感が若干なりをひそめたのは残念であるが，小田の主張は一貫している。

それは絶えず「される側」の視点で考え，市民の立場で社会に関わろうとする姿勢である。小田は物事を根源的に考え，シンプルにわかりやすく本質を抽出するのが上手い。そしてそのような小田の言葉の数々に彼が言いたいことが凝縮されている。

「『市民』は『される側』、『殺される側』」であり「権力者は『する側』」である(33頁)。そのことを小田に刻印したのが大阪空襲であった。空襲する側からはわからない地獄の「『現場』は、『される側』に立たなければわからない」(50頁)という体験が小田の戦後の歩みを大きく規定したのである。そのような小田にとってみれば「政治には、まず不信感を持つべき」であり「これが、『される側』の第一鉄則」(125頁)になるのは当然だったし、「『国民』と言い出すのは、国家からひどい目に遭っていない人たち」(42頁)と断言することができた。

そして小田は「正義の戦争」などないのだと主張する。それは「正義の戦争」を称える側が「非正義」側と戦闘する際、絶えず「非正義」側以上の武力行使をエスカレートさせる破滅の悪循環に猛進するからである(100頁)。その結果が原子爆弾であったことはいうまでもない。

であるがゆえに「日本人の特徴のひとつに、『される側』の人たちが進んで『する側』の立場で考える、という奇妙なこと」に小田は常に違和感を募らせ、「小田さんの言うとおりにやったら日本国はつぶれます」と述べる人に「『あなたは総理大臣か』と言ってやります」と切り返すのだ(33頁)。

一方、小田のいう市民とは「市民全体に相渡る問題を考え、解決していこうとする主体」のことであり、「一緒に問題を抱えている人が何らかのかたちで一緒に動こうとすると、『市民社会』が形成される」(『ここで跳べ』248頁)。「職能」(職業と能力)で解決できないとき市民は生まれ、その市民社会の原形を小田は名刺交換をしないデモ行進のイメージに求めている(40頁)。

以上の小田の基本哲学が「九・一一以後の世界をどのように捉えるか」(261頁)という主題の下に歴史的経緯と現代社会の諸事象を踏まえながら学生たちに語られていく。これが本書の内容の大枠である。

小田は本書Ⅰの講義で「私がこの講座でやりたいことは、分析や認識の学問ではなく、実際の現

場のなかでどう生きるか、現場でどうものを考えるのか」(23頁)ということだと宣言している。小田は決して「思考のなかの哲学」(Philosophy in Thought)の意味を否定しないが、それよりも「行動のなかの哲学」(Philosophy in Action)を重視する(18頁)。それは先に小田が定義した能動的な市民像を見れば明らかである。

そうした小田の情熱に呼応するかのように受講生も大量生産社会の中で人は自己の欲望を制御できるのか(68頁)、イラク攻撃を目前にして市民運動は有効なのか(101頁)、といった質問を投げかける。それに対して小田は「それぞれ『現場』で考えている人たちが有機的に連関しながらつくっていくしかないと思います。小さなことでもいいから変えていくということしか、答えはない。すっぱりした答えはあり得ない」(69頁)、「市民が集まる。デモをする。署名運動をする。そうしたことから始めるしかないだろう。市民運動に直接効果なんか求めたら、それは愚というものだ。市民運動の出発点は、一人一人として考えるということです」(103~104頁)と各人の当事者性の自覚を促している。その他、東京都知事選挙に立候補しなかった理由(128頁)、北朝鮮と「拉致」問題の認識(153頁)、コソボ紛争の異なる解決方法(208頁)、戦争責任と天皇制と平和憲法の問題(238頁)など率直な問答が活況を呈したのは、両者が真剣に物事を考えようとしたことを物語っている。

その中で、小田が何よりも学生に望んだのは日本社会を覆う国家自由主義の風潮を脱する思考であったろう。久野収の持論である日本の自由主義(リベラリズム)は「ナリブ(Nalib=ナショナル・リベラリズム)」に過ぎないという説を引き、小田は「せめてナリブになるな、本当の個人になれ」と訴えた(176頁)。

この「ナリブ」を排する考え方は、「アメリカは、ミクロネシアの基地で原爆を積み、日本へ持ってきて落とした。その被害者のなかには、アメリカ人もオーストラリア人もいた。朝鮮人は、全体の

一割以上いた。広島以北のほうへ上がる鉄道は、強制連行で連れてこられた朝鮮人によってつくられています。このように、原爆ひとつのなかにあらゆるものが集積している。そういう全体的視点で原爆を見てほしい」と「植民地の堆積の歴史」を説く小田の発言に集約されている（57～58頁）。

以上の内容紹介を踏まえ、冒頭の「大学は市民養成の学校たりえているのか」という問題提起に引き付けながら本書の意義を以下の四点にそって考察したい。第一に、編者の「大学改革」への異議申し立ての書であること。第二に、小田実の大学見直し論であること。第三に、小田実の格好の入門書であること。第四に、市民として自己の在り方を問うものであることである。主に第一と第二は、『小田実の世直し大学』、『ここで跳べ』、『生きる術としての哲学』の三部作合わせての評価ということにもなる。

まず第一の編者の「大学改革」への異議申し立ての書ということに関して、押し寄せる「大学改革」の方向性に志が見えず、大学とは一体どのような場であるのかその問いに向き合っていないと強い疑問（『大学』14頁）をもつ高草木は無論だが、とりわけもう一人の編者である飯田裕康の問題意識に焦点を当ててみたい。

飯田は「ところてん式の教育マシーン・人的資本供給マシーン」（5頁）に堕ちた現行の大学に深い憂いをもつ。そして小田の招聘自体、学内で「経済学教育と一体何の関係があるのか」といった実に偏狭な学問観が、何の恥じらいもなくたたきつけられる」（6～7頁）状況があったことを吐露している。

にもかかわらず飯田を衝き動かしたのは「私にとっての原点は、六五年の慶應における学費値上げ反対闘争に行き着くのです」と彼に言わしめた思いである。飯田はそのとき「市民としての自分たちの権利を堂々と主張した慶應の学費闘争に参加した学生諸君の地道さと一途さ」を自己の初心としたのである（『大学』76頁）。「若者の力を信頼せずして何が大学なのか」、「いまの大学は、こ

のいちばん大事な学生への信頼を、よそ事としてしまっている」（『大学』iii頁）という飯田の信念がなければ、この三部作は生まれなかったかもしれない。飯田のエピソードには世代論として戦争体験から戦後体験に研究対象が移行しつつあることを感じないわけにはいかない。

いずれにせよ両編者の講義と講義録にかけるエネルギーこそ改めて評価されるべきであるし、真剣に講義を用意するという行為が学生と大学にとっていかに意味があるかという遺産を本書は残したといえる。

次に小田実の大学見直し論としてこの三部作を見ることができよう。小田は「知識と思考の土台を形成するのが大学」（『大学』150頁）という認識をもっていった。飯田がいうように小田が理想としたのは国立大学でも私立大学でもなく「市民立大学」（8頁）であった。小田は市民を蚊帳の外に置く大学院重点化に反対する。問題は大学院ではなく将来の市民たる学生を相手にする大学（学部）であるとし、「知的に『豊かな市民』をつくること、これが大学の最大の目標」であると述べるのである（『大学』39頁）。

その際、小田が考える大学の意義とは、研究者が構築する「知のパラダイム」と将来の市民たる学生が提起する「問題のパラダイム」が互いにお互い交錯する場に存在する。「知のパラダイム」は問題群の存在、それに迫る視点や判断力を市民の「問題のパラダイム」に加え、逆に「問題のパラダイム」は「こんな研究は人間にとって何の意味があるのだ、という実人生からの一撃」を研究者に突きつけ、知の遊戯化を批判する（『大学』35～36頁）。そうした双方向の開かれた対話こそ再考されるべき大学の本質であると提起したのである。

こうした小田の講義に大勢の受講生が興味をもち、多くの刺激を得たことは想像に難くない。ただ、小田の講義を半年聞いた程度で直接的な効果を期待するのはあまりに虫がよすぎる話である。教育とは迂遠なコミュニケーションであるのだから。それよりも私たちが見つめるべき所在は、小

田と編者が自らの思想と生き方の胸襟を開き、直に若者に向き合い、信頼と希望をつないでいくという姿勢であろう。それを正されるのは決して大学教員に限ったことではないはずである。

第三は、小田実の格好の入門書になっていることである。大阪空襲、『何でも見てやろう』の世界体験、ベ平連、震災体験と「市民＝議員立法」の運動という小田の転換点から培われてきた『『難死』の思想』や、『『民主主義』と『平和主義』という極めて明快な構造』（『ここで跳べ』ii頁）をもつ小田の思想が過不足なく展開されているからである。

それにしても小田の大阪空襲の体験を鑑みると、人間にとって自己の行動の源になるような原体験とは何かを考えざるをえない。ともすると不満を内閉させ行動の回路を断つ人が多い中で、小田の怒りに発する行動力には驚かされる。

そうした小田の思想を形成する上で、例えば「田舎の弁護士」で「最後まで天皇制に反対していた」（『大学』143頁）父親の影響は見逃せないはずである。戦中に小田の「母が新聞にのった天皇の写真をもったいない」と言っただけを、不機嫌にしかつたことがある。そんなもん、新聞やないか」（『私と天皇・人びとのなかの天皇』ちくま文庫版37頁）といったのは小田の父親であった。あるいは鶴橋の在日朝鮮人のコミュニティを含む大阪の闇市で小田はどのような思考を積み上げていったのだろうか（170頁、『私と天皇・人びとのなかの天皇』13頁）。小田の詳細な伝記がいつか書かれることを期待したい。その際、大雑把だが的を射ていると形容できそうな小田の思想だけを組上にあげるべきではない。圧倒的な行動の業績はもとより、怒り、大阪弁、命令形の多さといった彼の思想を支える感情や思想を伝えていくコミュニケーションのスタイルにも小田の真価があると考えられるからである。

第四に本書が市民として自己の在り方を問うて

くるものであるということだ。「ひとりでもやる、ひとりでもやめる」に象徴されるように傍観者であってならないという小田のメッセージは至る所に散見される。しかし、小田はただ単に行動すればいいといっているのではない。彼の思想のもう一つの原点としてアテナイに重きを置いていたように公の場で議論し、ともに考え、課題を浮き上がらせて行動することが重要であると主張しているのである（『大学』159頁）。常に他者を介在させ、相互の議論の中で形成される行動の思想を小田は尊んだ。私たちが日常の生活の中で、「職能」を離れて、日々どれほど人と議論し、書き、発信し、行動しているのか。本書はその自己点検を迫っている。

本書で物足りなかったのは、学生を含む我々が日々の判断材料を形成し、小田自らが多くの論考を寄せたジャーナリズムが論点にならなかったため彼がそれにどのような意見をもっていたのかわからなかったことである。しかし、それはゲストにジャーナリストがいなかったという要因が大きいと思われるし、太い幹を汲む行為の中にあっては無いものねだりにすぎない。それよりも「三田の小田さん」（4頁）が現出した気風を次につなげるために少なくとも本書は慶應義塾大学経済学部の新任教員や、大学教員を志す同研究科を修了する大学院生に贈られてほしいと願わずにはいられない。

「シッカリシロヨ、オッサン、と、私は堀田氏の肩を叩きたくなった」とは『何でも見てやろう』の一文であるが、時代を越えて私たちがまたあの小田の語り口で絶えず肩を叩かれているであろうことを忘れたくない。その道しるべとしてこの最後の講義録はいつまでも光源を失わないだろう。

根津 朝彦

（総合研究大学院大学博士後期課程／
日本学術振興会特別研究員）